

一九七七年二月一日第三種郵便物認可

発行所 社会通信社

発行人 滝野 忠

e-mail: shakatsushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八の二コーポル幡ヶ谷九〇四 電話(03)3377-4649 FAX(03)3299-5367  
振替 〇〇一〇〇一九一五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

購読料 月額 700円 6カ月前納制

### 〈もくじ〉

#### ■巻頭言■

KOBEからもう一つの選択

— 二大政党にくみしない力を —

「新社会兵庫」…… 2

「上見て暮らすな、下見て暮らせ」

— 現在と 思想状況 —

羽川 健治…… 3

キユーバへの期待

小林 晃…… 5

新しい政治文化をつくりだした

— キユーバ革命の五十年 —

滝野 忠…… 6

オンボロバスとサルサ、思想闘争

— キユーバ訪問記 —

鈴木 賢二…… 10

量的拡大から質的転換へ

— 労働運動の再生を地域労働運動から考える (二) —

中村 平治…… 11

駅職場での意識改革事例

— 今、JRの職場では (三) —

…… 13

読者からのおたより

…… 14

# 旬刊 社会通信

NO. 1055

二〇〇九年九月一日号

二〇〇九年九月一日発行  
(毎月一日・二五日二回発行)

## K O B E からもう一つの選択

— 二大政党にくみしない力を —

待ちに待った総選挙。原和美さんが立候補を表明したのは昨年九月二〇日。一年近くもの選挙準備を誰が予想しただろうか。誕生した麻生政権は選挙管理内閣のはずだった。ところが、アメリカ発金融危機による経済悪化が日本を直撃。本来であれば、国民に信を問うべきであったが、自らの延命策のため経済立て直し策を優先。しかし、その施策は、内閣支持率を上げるための党利党略が見え隠れし、定額給付金などのバラマキ策は将来への大衆増税につながる大失政となった。

そもそも、小泉政権下で行われた規制緩和と民営化は、弱肉強食を煽り、労働者派遣法の製造業への拡大で多くの若者は非正規で働かざるを得ず、年金・医療制度の改悪で多くの高齢者は老後への不安を感じている。この社会の格差の拡大と不公平感に言いようのない怒りが多くの国民に蓄積していた。

麻生政権の失政は、その怒りをさらに倍加し、小選挙区制度による二大政党下、都議選の結果に象徴されるように民主党への支持の異常な広がりとなって現れている。そこには「政策」があるわけではなく、「政権交代」だけがあるといっても過言ではない。小沢や鳩山の政治献金問題があっても「政権交代」のこの流れは変わらないであろう。しかし、新たな政権を担うであろう民主党の現職議員や候補者の多くは、憲法改正論者や松下政経塾出身者など新自由主義的考えの持ち主たちである。この政権が、国民の多くが抱いている格差や不公平感を真に解決するとは思えない。むしろ、来年五月に法が施行される憲法改正国民投票への動きが一気にすすみ、9条改悪が現実化を帯びてくる。また、規制緩和・民営化などがさらに進み、より格差・貧困が拡大し、国民の生存権が脅かされるかもしれない。

だからこそ、民主党にまかせるわけにはいかないのである。二大政党にくみしない力を育て、小選挙区制度そのものの見直しをする展望を見出さなければならぬ。

「K O B E からもう一つの選択 憲法9条、25条を守る原和美の出番です」のキャッチフレーズは、政権交代選挙での私たちの立ち位置を表明している。今回の選挙で、社民党までが民主党へなびく中、憲法9条、憲法25条を守り生かす勢力を原和美選挙に総結集し、小選挙区で勝利することが政権交代下での護憲派の次の展望を生み出すことになると思うのである。

原和美後援会長であり著名な金融経済学者である本山美彦氏は、このことを懐かしい言葉で「左翼バネ」と呼んだ。まさに、政権交代だからこそ「左翼バネ」を活かさないといけないのである。その「左翼バネに原和美」を、そして、われわれ選挙を担う一人一人が「左翼バネ」になることを決意することが求められているのである。

確かに、小選挙区制度で二大政党が目され、政党要件のない私たちは苦戦を強いられている。しかし、この二大政党を心から信用信頼している人はわずかである。多くの人々は政治不信の中にあり、将来の生活に老若男女を問わず不安を抱えている。

私たちの日常活動は地味だけれども続けていけば、必ずこれら人々とのつながりができるはずだ。それは遠い将来でなく、この「選挙」かもしれない。私たちがあきらめない限り、その可能性は広がってゆく。みんなで「突き抜ける」までやってみようではないか。

(あわはら富夫・原和美を国会へ送る会代表、神戸市議、「新社会兵庫」三三〇号)

## 「上見て暮らすな、下見て暮らせ」

— 現在と思想状況 —

八月一日、兵庫県東灘区御影公会堂で「KOBÉからもう一つの選択—原和美を国会に送る会」が開催されました。会場いっぱいの方々のなか後援会会長・京都大学名誉教授本山義彦さん、前衆議院議員の辻本清美さん、新社会党本部委員長の栗原君子さん、近畿ブロック比例代表選挙予定候補者の服部良一さん達が次々と演壇に立ちました。

目的は「原和美の勝利」「護憲の第三極づくりにつながる予定候補者の団結・勝利」「憲法体制の維持・強化」です。この会では、現在、政治情勢の最大のテーマであるレーガン、サッチャー、中曽根、小泉とつづいた「規制緩和」の内容には具体的に触れずとも、栗原君子委員長と原和美予定候補者のお話しが突出して原則的で分かりやすく、現状をしっかりと掴まえていました。

### 現在情勢 三つの焦点

両氏は構造改革の結果として—

1、労働者の仕事とくらしがズタズタにされたこと。労働者派遣法が作られ労働者への扱いが虫けらの如くになったこと。労働者（筆者 身体だけが「資本」であり、雇用されて支払われる賃金のみが生きる術のすべての人々。農林水産商工業の経営者は除く）五一〇〇万人の内八分の一に当たる一七〇〇万人が非正規労働者であって年収三〇〇万円以下、その内一〇〇〇万人が年収二〇〇万円以下。首切り・超過勤務手当不払いが正規労働者にまで及んできている。（筆者 これらは一九八五年当時の日経連が「新しい時代における日本の経営」として政府に申し入れたもの）

今、選挙を控えて各党はマニフェストで、子供・教育・老後対策などを示しているが基本が崩れていてあくまで選挙対策でしかない。（筆者 すべての人々は労働者の生産物でしか生きて行けない。労働者は社会の主人公である。このことを抜いた議論は空理空論でしかない）このように労働者の労働実態と生活はツギハギであって安定していない。

2、人々は命まで奪われていること。年間三万人を超す自殺者、今年は過去最悪になりそう。（筆者 六月末で一万七〇〇〇人を越えている）さまざまな事件は「人間の疎外」までを示しており、人間そのものが奪われている。

兵庫淡路大震災は何を物語っているのか。豚インフルエンザは何を物語っているのか。すべての事前・事後は政治の貧困を示している。人間中心でない。ぼる儲けのた

めには巨大企業中心の政策であって、貧困と格差が拡大しすべてを歪めている。

さらに本来ならばこれらにメスを入れ、富の再配分を進めるために福祉政策を進めなければならぬが、年金・医療・介護・教育・乳幼児対策などはゼロに等しい。「上見て暮らすな、下見て暮らせ」の世論操作が浸透して、反発さえできにくくされている。

3、憲法体制が危機状態であること。憲法は立憲主義に基づいて権力者の横暴を食い止めるために存在している。しかし絶対平和主義の九条、くらしを保障した二五条、さまざまに細かく規定した権利の条項が死に瀕している。

自衛隊は海外にむけて公然と「人を殺しに行く」時代になった。内には抑圧機関になっている。護憲を高らかに言わなければならない。憲法をくらしに、職場に、地域に生かす仲間づくりを進めなければならない。

### 新自由主義 思想攻撃

何という原則を生かしたお話だろう。どの政党も本質を隠して耳触りのよい言辞を弄しているが、やっぱり新社会党であり、原和美さんである。筆者は補足をしますが「新自由主義」の理解についてです。「新自由主義」は単に「規制を無くした市場にして資本のぼろ儲けを促す」その一方で、「労働者の搾取は強まり、競争の激化、貧困と富の格差拡大」が進む、という現象面だけを把握してはいけけないと思います。本質は我々の思想まで奪い取るところにあると思います。栗原君子委員長は分かりやすく「上見て暮らすな、下見て暮らせ」の考え方に取り込まれている、とおっしゃいました。これは多くの人々が知っている江戸時代の差別分断政策を肯定する思想攻撃の柱です、これこそ権力者の最高のねらいです。

「反撃さえできない体制」が目的です。資本主義国の一方で世界の人口の三分の一の人々が生活する社会主義国が誕生しました。この時先進資本主義国は何をして体制維持を図ったのか。それは紛れもなく「福祉政策」での「反発抑止」でした。

日本では東京都・神奈川県・大阪府・京都府などの革新行政が単独で福祉政策を進めました。あわてた日本政府は遅れながらも押し進めざるを得ない状態でした。日本社会党・総評ブロックの闘いの賜物でもありました。

このように「福祉」は世界の先進国を圧巻した時代があったのです。そのように考えると今日は「自己努力」「自己責任」が圧倒的に人々を取り込んでいます。

だから「福祉社会」は「社会主義への一里塚」であり、今具体的に追求しなければならぬ課題なのです。このように考えると、「新自由主義」は「福祉社会の解体」という「思想攻撃」と一体であると捕まえるべきです。今日グローバル化していますから、一国単独の解釈は普遍性がありません。

日本の情勢（攻撃の内容も含めて）も世界とのかかわりで捕らまえるべきです。幸い我々は「日本国憲法」を持っています。世界に発信する前に、まず隣の仲間にどれだけ語り切れているのか検証したいものです。そして次に展望する社会は現在の中に内包されています。資本主義社会の「墓掘り」は賃金労働者です。

(二〇〇九年八月二日、新社会党奈良県本部、書記長 羽川 健治)

## キューバへの期待

もう一年以上前になるが、フィデル・カストロ国家評議会議長が、国家元首としての地位から正式に引退を表明し（〇八年一月一九日）、ラウル・カストロが、その後任に就いたことに関連して、ブルジョア・マスコミは、その本性丸出しに、所詮は「院政」にすぎないと揶揄しつつ、次のように論評している。

「今回の国家評議会の顔ぶれを見ると、暫定的な『院政』が正式の形になったといえる。／ラウル氏は暫定的な権力委譲の当初は現実路線へのかじ取りが期待されたが、目立った指導力はみせていない。／一党独裁下で思想統制や人権抑圧を続けていては、キューバに未来はない。」（〇八・二・二七、「朝日新聞」、社説）。

なお、ここで一言補足しておけば、社会主義政権下の政党が、単独か複数かは、その国その時の歴史的・社会的諸条件のいかんに依ることであって、それ自体が民主主義的であるか否かの尺度となるものでないことは、本誌の読者には説明を要しまい。

ところが、同じジャーナリストでも、社会主義の現実を素直に直視できる眼をもっている人物—もつとも、このことが、未長く可能であるためには、正しい理論的裏付けが必要だが—の論評は、先のブルジョア社説とは、まったく対照的である。

「その（二〇〇三年）ころ、私はまだキューバについて正しい知識がなく、キューバのイメージは、『社会主義＝国民の自由がない』（テロ支援国家）、（威圧的なカストロ）の存在と戦闘服—など…。芳しくないイメージばかりを抱かされてきた。しかし、この国に足を一步踏み入れたとたん、私の先入観は打ちくだかれた。陽気な笑い声と街中で見られる人間的な情景、勤勉で規律正しく生きる気高く活力あふれる人々。キューバを訪れたことで、私の人生観は大きく変わった。経済困難の下で物資不足に悩まされる貧しい暮らしを強いられながら、その背後にある『豊かな暮らし』。そこには、人々が惜しみなく愛を注ぎ合い、知恵を出し合って生きる『本当の幸せ』があった。」（吉田沙由里『小さな国の大きな奇跡』、WAVE出版、二〇〇八年、四～五頁。ゲバラの愛娘アイダの特別寄稿付き）。

「国民は教育・医療・福祉などを無償で受けることができ、最低の生活費は所得として得ている。そして、年金暮らしや妊婦、また生活困窮者などには、それぞれの地区に設けられた食堂で、ただ同然で朝昼晩の食事が取れるようなシステムもあり、ひとり暮らしの高齢者は養護施設で保護される。また亡くなった後の葬式や墓代などもすべて無償である。そのため、日本人が通常、人生設計のために必要とするお金を必要としない。」（同、五五頁）。

「キューバを知ること、私の世界観も変わった。キューバを知ること、地球の裏側で起こっている理不尽を知ることにもなった。キューバが革命を経て改革を目指し、社会主義を選択した理由は、人として生きるための権利の奪取、すなわち人間が人間らしく暮らすための人間国家の建設を目指したものであり、それらはキューバ人の並々ならぬ団結力によって支えられてきたのだ。」（同、二一八頁）。

キューバは、今年〇九年で、革命五〇周年を迎えた。しかし、先輩ソ連は、七〇年

余にして崩壊（反革命）した。社会主義キューバにとつて、これからが、いわば正念場である。ここを乗り切つて、さらに前進し続けるための決定的要件は、やはり何と

いつても、社会主義建設を指導する任務を負う党の力量とその強化いかんであろう。そのためには、第一に、党内（とりわけ、その中枢部）における理論的・思想的な鍛錬と研鑽、第二に、党内民主主義の徹底と維持・強化、そして第三に、社会主義とは「階級闘争の終了ではなく、新しい形でのその継続である」（全集、第二九卷、三八二頁ほか）というレーニンの遺訓を、片時も忘れないことであろう。このことがまた、ソ連・東欧の崩壊から学ぶべき教訓でもある、と考える。一言でいえば、要するに、「初心忘るべからず」である。

そうであれば、たとえ自分、経済建設は亀の歩みであつても、国民の圧倒的な支持と信頼のもとで、社会主義キューバは、われわれの、そして世界の期待と希望の星として、ますます輝き続けるに違いない。

（小林 晃）

## 新しい政治文化をつくりだした

— キューバ革命の五十年 —

キューバ革命は一九五九年一月一日、今年はキューバ革命五〇年、さらにこの数年ベネズエラのチャベスの政権基盤確立、世界政治における米国支配の動揺でカリブ海・中米・南米諸国に次つぎと「反・非」米諸国が誕生し、キューバの存在感が増しています。だつてそうでしょう、キューバを軍事的・政治的・経済的に圧殺しつづけてきた米国ですら、「反・非」米国のウネリに抗しきれず、オバマ君は「仲良くしようよ」と、キューバに握手を求めるまでになりました。

オバマ君は一九六〇年以降の対キューバ「封鎖」政策を反省していらつしやるのでしょうか。そうではなく、その場しのぎの言葉でしかありません。米国が中心で「反米」勢力を封じ込める目的でつくられたのが米州機構（OAS）という政治・軍事機構でした。これまで何十、何百もの民族主義政権を武力で倒しつづけてきました。その中、唯一五十年生き残ったのがフイデルとラウル兄弟のキューバ社会主義政権でした。

キューバは米国の最前線基地から百六十キロ足らずです、日本でいえば東京から静岡でしかありません。最新兵器で攻撃すれば、いつでも壊滅可能な地理にあるのです。五十年にわたる米国からの経済戦争、そして一九九〇年前後のソ連・東欧社会主義政権の崩壊という「二重の困難」をキューバはなぜ乗り越えることができ、世界政治に輝きを増しているのか、その「秘密」にせまってみました。

### ソ連崩壊 — 一つの背景

二〇〇三年三月、イリュージン62—このソ連製の飛行機でカストロさんは一九七一年チリを訪問。なんとカストロさんはこの「オンボロ」機を三十二年間も使つてる。

キューバでは節約が効率化の方法でもあつたんですよねーで日本をふくむ国際行脚から帰つたばかりのカストロさんは人民権力全国会議の議長就任式で、「彼ら中国とベ

トナムは、誰ひとりとしてキューバ革命が生き延びることができるとはまったく信じていなかったあの『非常時』の信じられないくらい困難な日々を通じて、最良の友人であった」と報告していました。

キューバ革命が生き残ったもつとも大きな「秘密」は思想・理念―カストロさん、ゲバラさんはマルクス主義者―を大事にしその発展に力を注ぎ続けてきたことでした。ソ連という巨大な国がなぜ崩壊してしまったのかについて、カストロさんは次のように述べています。

「社会主義陣営とソ連は、基本的に自らの過ちによって破壊されたものではありません。うそ、欺瞞、デマ情報などを操るマスメディアという恐るべき機構によって破壊されたのです。人々は、信じこまされていったのです。誰一人、消費主義社会の西側世界が、今日想像できる最も素晴らしい世界だという幻想に抗しきれなかったのです。こうした宣伝攻勢には、進歩的な理想主義者も対抗できなかったのです。

理想を信じて奮闘した人はじつに大勢いましたが、圧倒的なうその幻想と闘う手段や方法、対応策を発見し展開することができませんでした。彼ら（米国）は阿呆ではありませんでした。そのエネルギーを、たとえばVOA（アメリカの声）のようなラジオ放送に傾けました。世界の隅々に、社会主義社会の心臓部にまで彼らのあらゆる幻想やあらゆるそを送りこみ、数百万の人々を分断していったのです。

うそと幻想を送り込まれた国の中には巨大国家もありましたが、狭量な精神と教条主義のようなものがはびこって、（社会主義の）教義が宗教や官僚主義に変質したり、歴史のゆり戻しを許した事情も、多くありました。本来なら社会主義の成熟に向けて大いなる努力が必要だったのが、逆に破壊されてしまったのです。破壊の最大の起爆剤が、資本主義と帝国主義が一貫して喧伝しつづけたうそと幻想であったのです。」

（『フイデル・カストロ 二〇世紀最後の提言』現代書館、三五〇～三五二頁）

カストロさんが強調することは、資本主義世界のマスメディアがたれ流すウソと欺瞞の情報、そして資本主義的消費文明をしつかりと見抜く世界観とその世界観にもとづく宣伝、そして民衆と結びつく努力がなによりも重要といい、キューバはマルクス世界観とその思想闘争を実践してきたことです。

### 「思想・良心の種を蒔け」

カストロさんゲバラさんといえばキューバ革命の象徴であるスローガン「祖国か死か」を誰もが思い起こされるのではないのでしょうか。しかし、キューバの教育現場、そして政治組織でもつとも大事にされているのが「思想の種を蒔け！」「良心の種を蒔け！」「思想闘争は引き続き前進する！」「最後の勝利の日まで」なんです。

カストロさんの思想は「人間を信じる」、「知は力」なんです。そして考える力を身につけとともに成長し合っていくという確信です。この想いをキューバ人民に植えつけたんです、さらにひろめつづけていることです。カストロが播いた「思想の種」「良心の種」は革命から五十年たった今、革命戦士だった子から孫へと受け継がれ、全世界で、良心と自由、人間の尊厳の種を播く独自の活動が続けられています。

## 政治文化に自信

キューバのお医者さん、先生は他国の求めがあれば地球上どこにでも飛び出し治療にあたります。今、世界六十ヶ国で四万六千人ものキューバ人医師、医療関係者が活動しています。アフガンで活躍する中村哲さんのようなお医者さんをキューバは国をあげて育てているということです。こんにちの帝国主義国家の特徴は貧困の上に官僚機構を大きくしていること、低開発で育った人材をお金でほったたき釣り上げることです。金融資本は金儲けには熱を上げるが、人材をつくることはちっともしないのです。国際会議で費消されるほんのわずかなお金で世界が救われるというのではありません。

スポーツ選手はグローバルですよね。野球、バスケットボールの選手はアメリカを目ざし、サッカー選手はEUをめざすといったようにです。キューバから国外に派遣されたキューバ人医師を買収する策動は日常的におこなわれているようですが、金につられてキューバからサヨナラする医師はほとんどいないようです。しかし、キューバって国は「キューバにいたくないならご自由に」とじつに大らかです。ソ連崩壊で極端なモノ不足におちいった時、アメリカからの誘惑にまけて多くの人が船やいかで脱出したことを記憶されているにちがいありません。その時、キューバは「ご自由に」と放任しました。それほどキューバは政治文化に自信をもっていたのです。

## 困難な時ほど思想がたしかめられる 政治文化

ソ連崩壊でキューバは壊滅的な打撃を受けました。その理由はあとで記しますが、アメリカは絶好の好機と経済戦争を強め、世界市場からキューバを締め出す兵糧作戦をさらに強めておりました。ソ連との貿易の崩壊は冒頭述べた状況にキューバを追いやったのです。言語に絶する危機が発生しました。これをキューバは「二重の困難」と表現しています。

これを克服したのが思想闘争でつくられたキューバ国民の政治文化でした。平等と公正がてつて的に論議され、品物についても値上げするもの、値下げするもの、あるいは絶対に減らせないものはなにかといったようにです。

『キューバの素顔』（NHK取材班、昭和五七年刊）にキューバと日本の政治文化が根本的に異なるおもしろい叙述が見られます。革命から二十三年後のNHK記者とキューバ放送協会の三十歳代後半の女性職員との会話です。最初に取材した相手は「一般市民」の意識を知る取材とならなかった」と、別の人をNHK取材班は求めたのです。

『』というわけで、ぜひ今度は政治的でない人物を選んで取材したいのです』

『ハア？ 政治的でない人間？ この世に非政治的な人間なんていませんよ。人間は直接政治に関わっていないなくても、たとえば政治に関心を持たない人でも、その無関心であること自体が実に政治的なことなんですよ』

彼女の指摘はもったもなことであった。こちら側は何ら反論することもできなかった。つい、日本国内と同じような調子で話したのが間違いであった。

日本では、金権腐敗政治が問題になったり、防衛費をめぐる論争が起きたりしても、



堂々と『私にはよくわかりません』とか『私は政治的な人間じゃないから、特に関心はありませんね』などと話す市民が意外と多く見受けられる。日本でなら、＼非政治的な人間＼という表現も通用するのだが、キューバのように政治教育が徹底した国では事情がまるで違っている。結局、彼女には表現を変えて協力を要請した。

『たしかにあなたのおっしやる通りです。では、共産党員でない人の家庭を訪れるということ、取材先を捜すのに協力してください』

『はい、そういう意味なら、私にも理解できます』

昭和五七年から二十七年もたったのに日本の政治文化はますますひどくなる一方であり、それに対し「二重の困難」を克服したキューバは「今の夢は、明日の現実である」と思想闘争、国際連帯を強めるなかで経済を発展させています。

### ラテンアメリカ情勢は新たな段階に

ベネズエラ革命は「一極支配」のどまん中で起こりました。二〇〇〇年代半ば以降、世界情勢は大きく変わりました。「一極」の力が急速に後退したのです。これまで中南米で革命、民族主義を主導する国が生まれた時、アメリカは「共産主義、ソ連の陰謀」と誹謗中傷し、国民を分断してきました。しかし、地球上からキューバを除き共産主義国家は姿を消しました。そんな中で、中南米諸国にぞくぞくと「反・非米」を唱える政治指導者が生まれています。

それをもっともよく示すのが六月におこなわれたOAS（米州機構総会）で、OASへのキューバ再加盟決議にアメリカが抗しえなかつたことです。キューバは五〇年の社会主義継続の中で、「アメリカという帝国主義にまさにその道具を使った敗北をもたらした」（OAS決議へのキューバの見解）のです。

キューバがすすめる国際連帯は今ではすべての中南米諸国におよんでいます。カストロさんの五十年は真にグローバルな世界をつくる種を蒔いたのです。

### 新しい政治文化

くり返しになりますが、最後にもう一度カストロさんから革命継続の秘密を語ってもらうことにします。

「私は、人類史を通じて、搾取者たちにとって無知が最も強力でも最も恐るべき武器であるという、極めて堅固な信念を抱くにいたった。

言葉と反論しえない事実によって民衆に真実を教えたことが、我々が実現した栄光ある偉業の本質的要素である。」

キューバでは全人格形成をめざす学習と教育がおこなわれ、新しい政治文化が確固として根付いたのです。

カストロさん、ゲバラさん大好きな人間は少なくありませんね。カストロさんはキューバの権力者、カストロさんのもっとも大切な同志・ゲバラさんは「第二、第三のキューバ・ベトナムを」と、新たな夢をアフリカ、南米に求め旅立ちました。カストロさんとゲバラさんの志は同じだったんです。カストロさんは「キューバに社会主義の政治文化をつくる。君は世界にそれをつくれ」と。

カストロさんが二〇〇三年、政治権力を確立しつつあったベネズエラに行き演説した時、聴衆からの「ゲバラはどこにいる」とのヤジに、カストロさんが「私の今の演説の中にいる」と即答したことに示されています。(滝野 忠)

## オンボロバスとサルサ、思想闘争

— キューバ訪問記 —

四月二七日～五月五日にかけて社会主義国キューバを訪問した、私が特に感じたことは、青年や子供達が非常に多く、どの街にも溢れている感じであった、町中を走っている車は、どれも古く、バスはオンボロバスであるが、どれもギョウギョウ詰めであった、家々も古い家が多いが、現在修復中のものが多く、旧市街地区は特に修復中の家が多かった、修復が完成すれば綺麗な街になることだろう。街路樹はマメ科の大木で「キン鎖の木」のようなものが沢山あり、ところどころに金色のフジのような花を付けていた。満開の頃はさぞかし綺麗だろう。また、いたるところにマンゴーや椰子、ココナツの木が沢山の実を付け、とても南国情緒に溢れていた。特にアディルフアと言う花（日本で見る西洋シャクナゲのような花）が咲き乱れているのは印象的であった。

また、キューバは、音楽が盛んでレストランをはじめ、いろいろな街角で演奏していた。ギロやマラカス、ボンゴ、ギターと、歌の組み合わせである、いわゆるラテン音楽である、これに併せて踊りが盛んで、特にサルサはキューバ人なら誰でも踊るようである。五月二日の夜にはハバナのナショナルホテルにある大望の「ブエナビスタ・ソシアル・クラブ」で、デナーと合わせて専属のバンドの演奏による、サルサを、私も踊ってしまった（私はサルサは出来ないが見よう見まねで踊った）。

四月三〇日のカーサ・デ・アミスタ（友好の家）で、キューバ革命をカストロやゲバラと共に戦った戦士との交流があり、私は、キューバが現在「思想闘争」の分野でどのような点を重視して進めているかについて質問した、彼曰く、若い人達に当時の経験を語り告ぐこと、チェ・ゲバラの生き様を中心に教育に力を注いでいるとの回答だった。

アメリカ帝国主義の五〇年に渡る経済封鎖にも負けず、国際主義に基づく独自のキューバ社会主義を守る決意が彼の発言から、ひしひしと感じられた。なか日には、キューバ島の中心にある、サンタ・クララのチェ・ゲバラの記念館を訪れた。展示されているチェ・ゲバラがカストロに宛てた最後の手紙を現地のガイドが日本語に訳したものを、私達一人一人のプレゼントしてくれたので、その一部を引用する。

「僕は妻子には何も残さなかった。それを後悔するどころか、むしろ満足している。国家がわれわれの必要とするものや教育をあたえてくれるだろうから、僕が彼らのために求めるものは何もない。」と。

そして彼は、圧政に苦しむ南米のボリビアに向かい、その地で戦死したのである。最後に、ハバナの酒「ラム酒」で作ったカクテルの「モヒート」は、ヘミングウェイも好んだとか？ ことのほか美味であった。

(鈴木 賢二)

# 量的拡大から質的転換へ

―労働運動の再生を地域労働運動から考える(二)―

## 地域ユニオン

地域ユニオン運動は日本労働運動の再建の大きな柱とされている。労働運動の社会的影響力の低下と「労使協調路線」の進行は、一九九五年に日経連が出した「新時代の日本的経営」で打ち出した三つの雇用形態、「長期蓄積型能力活用型」(終身雇用)、「高度専門能力活用型」(有期雇用契約)、「雇用柔軟型」(有期雇用契約)を「労働基準法」の改悪と「労働者派遣法」などにより労働者の使い捨てに作用している。

多くの労働組合が反合理化の闘いを放棄した結果、正規労働者の首切りと非正規労働者への置き換えを許してしまった。連合評価委員会の指摘する「恵まれた層の労働者の犠牲で、非正規労働者はすでに全労働者の三分の一以上となり、年収一五〇万円以下という労働者階級が激増しその勢いは止まらない。職場によっては正規労働者が過半数を割り「三六条協定」の締結権すら疑問を持たざるを得ない実態もある。

労働者の権利闘争において、非正規労働者の存在を認識しない運動は空論でしかない。労働者をはじめている。労働組合の指導部は、敵である資本は常に「安上がり」の労働者をつくり、労働者を分断し、労働強化と搾取強化の手段としている事を忘れていてではないか。

官・民の職場でワーキングプアの状況をつくり出している事は労働運動のみならず憲法25条の課題でもある。資本の分け前をそのままにし、働く者が残りを分かち合う「ワークシェアリング」という欺瞞に満ちた手法でなく、総資本と総労働の闘いのためにもユニオン運動を強める必要がある。

## 「おきたまユニオン」

米沢における「おきたまユニオン」は、一九九九年の全国地区労交流会神戸集會を契機に地区労とその後の地区平和センターが行っていた労働相談の受け皿組織として具体的に検討を開始した。当時ユニオンをつくる事を提起した私の問題意識として、①労働相談では事件解決すると人は残らない、この人達を継続的に仲間にできないか、②中小企業の労働者と未組織労働者の組織化と支援は地域運動にとって不可欠、③他の経験に学び、労働組合・組合員をこのユニオン運動に参加させる事によって運動が元気になるものになり、連帯意識につながって行く、というものであった。

五年間の議論などを経て「おきたまユニオン」は二〇〇四年三月に二重加盟組合員四〇名で結成した。現在の組合組織は、支部・九分会・一グループであり組合員二五〇名ほどまでなっている。ユニオンの活動のために支援カンパも拠出する組合がいくつもある。全国各地のユニオン運動・争議に既存労働組合が連帯する動きが起きている。尼崎の市役所の非正規労働者がストライキで立ち上がった闘いには自治労をはじめとする連帯・支援があったし、派遣村では多くの市民・ボランティアと労働者が連帯し共感を呼んだ。このような既存の労働組合が「連帯」して闘っている事例がお

きたまユニオンにもある。

①国鉄からJRになり「羽前小松駅」が業務委託となり「業務管理組合」に採用された労働者の首切り問題では町職労からの支援をもらいながら闘っている課題、②米沢市立図書館嘱託職員の「雇い止め解雇」裁判闘争では県内外からの抗議打電行動などの支援と近隣三地区平和センターと自治労置賜総支部が結集する「米沢市立図書館嘱託職員解雇撤回支援共闘会議」を結成し、財政カンパと裁判傍聴行動などを展開している課題、③米沢市立病院の療食科の依託問題による学校給食の嘱託職員の玉突き「雇い止め」問題では地区平和センターが軸となり関係四労組で「対策会議」をつくり、「統一要求書」の取組み、市立病院臨時職員労働組合の委任団交の実施等を含めて米沢市と教育委員会そして病院当局との闘争と交渉をしている課題などがある。

これらの闘いは「おきたまユニオンニュース」「米沢平和センターニュース」などを読んだ組合員の注目を集めている。まだまだ「連帯」と「関心」が高いとは言えないが、「闘うことの意義」と「団結のすばらしさ」などが労働者の中に入り込み、それぞれの労働組合運動にも火をつけると確信している。

### 運動を担う人づくりと退職者の活用

労働組合と同様に地域労働運動の人づくりが喫緊の課題となっている。労働運動が衰退した原因のひとつに活動家づくりが不充分であったと思う。地域労働運動の指導部は労働組合の幹部が兼担している事が多い。所属している労働組合の運動との連携という意味では良いが多忙すぎると優先が所属組合になるという支障もある。献身的な活動家と青年活動家などの層の厚い体制を望みたいが現実にはどこでも悩みの種である。この問題意識は相前から深刻な事として持たれてきた。

最近多少の地区ではあるが後継者・活動家づくりの取組みが始まっている。米沢においては、米沢地区平和センター主催の月一回の連続学習会をはじめた。前期は山下俊幸氏の「労働組合運動入門」をテキストにして六回の講座で実施し、その後の取組みについては各労組からの要望などを含め検討する事になっている。青年労働者などを主体にした学習会であり、どのように理解を深めてもらえるか、難しい事を取り上げているのではないか、など悩みと実感を持ちながらレジュメづくりをしている。

外野席からの注文も多くあるが、自分が楽しくやる事が一番とされている。本当に力となるかは数年後に検証されることであるが、試行錯誤でもやるしかないとして仲間と取組んでいる。

地域労働運動に関わっている活動家の高齢化の進行も現実である。団塊世代組合員は、多くの経験と運動実績を持ち合わせている。退職と共に運動から「卒業」ではあまりにも「もったいない」事として地区労OB会への結集、「熟年者ユニオン」で地域ユニオンを支援する取組みが出てきている。とにかく私たちには持ち合わせの手駒が絶対的に少ない。退職組である活動家を最大限に活用することは当事者の生甲斐にもなり一石二鳥である。

年配者がユニオン交渉に参加する事は、交渉事をより円満にむかわせるのにも有効なのかなと実感もしている。おきたまユニオン「熟年者分会」は退職した十名程度の

分会であるが、「二千坪のユニオン畑」で野菜をつくり収穫物を「ユニオン夏祭り」や福祉施設に寄付するボランティア活動とユニオン協力者にだけなっている段階である。今後の活動について分会集会を開催し、「何をしたいか」を議論し活動について方針化しようと考えている。

### 火種残し炎を大きく

私達が取組みはじめた中小企業労働者と非正規労働者の労働戦線への結集は、対象が無尽蔵的であり、この人々の結集が多くなればそれだけ社会を変える力が増大する。しかし、単なる「同情」からの運動や「争議解決屋的」活動では限界があるし疲労感のみが残るばかりである。大上段に構えれば、「世の中を変える」「社会を変える」という目的と使命感を持ち、火種を残すことから炎を大きくし、次の世代に引き継ぐ、自分の生きた証左を労働者階級の息子たちのため、など誇りを持ち合えるものとしたものである。

地域ユニオンの闘争と活動では「勝利」を勝ち取り、喜びの報告が多くある。労働基準法さえも守られていない職場での闘いである事が多いから最低限の法律を守らせる闘いとなり、勝てば「元氣」が出てくる。まだまだユニオン・地区労に相談をするのは氷山の一角でしかなく多くは泣き寝入りの状況である。しかし、一つひとつの争議・事件をより良く解決しても世の中を変えるまでには至らず、小西純一郎氏の提起にある「政治的な運動への高まり」がなければ階級闘争としては不十分なものでしかない。結論的には当面は量的拡大が最大の課題であるが、質への転換を意識しながら進める事が必要と考える。

(米沢 中村 平治)

## 駅職場での意識改革事例

— 今、JRの職場では (三) —

「明るく楽しい、しかし緊張感ある職場」とは？ これら(前号参照)は、昇進試験を軸にした提案・小集団・通信教育といった有名な「三点セット」だけでなく、以下の事例に見るように、時間内外を問わず、労働者の自発性を利用し、労働者をほめながら行われるので本人も悪い気はせず、それだけに会社の狙いに気づきにくくてやっかいである。

他方で、労働者のミスは徹底して追及、「責任ではなく原因追究」と言いつつも、管理者(支社も含む)数人で長時間取り囲み、職場の多忙さなどには耳も貸さず、「まるで犯罪人扱い」(当事者の感想)の事情聴取。これが、現場長が転勤挨拶で最近よく使う「明るく楽しい、しかし緊張感ある職場」の実体である。こうして、事故・ミスを起こさないための方法を労働者に考えさせ、他人の仕事へのチェックもまた「自分を守る」ための「仕事」になる。

こうしたことは労働者どうしの競争・監視を招くものであり、ひいては権利抑制・ノルマの強化など、自分の首を締めるものとなることは明らかである。他の組合員・分会との交流を積み重ね、常に会社の狙いを議論していく中で気づいていくしかない。

最近の駅職場での共通事例から ① 毎日の点呼 冒頭一人が指名され、皆の前で一言スピーチする。「事故防止」「サービス」などをテーマに、今日の自分の仕事への決意を話す。それに対し、助役が感想を述べる。

② サービス勉強会 毎回の資料は、社会人採用などが作る。駅収入の対前年比が下がってきている数字を駅長が紹介しながら、「こういう時はどうしたらよいか?」と一人一人に質問する。

③ 駅クリーンデー 「きれいな駅でお客様をお迎えする」を名目に、時間外で全員を対象に会社が始めた。駅コンコースと事務室・休憩室を対象。社員にも掃除希望箇所を出させる。

④ 当番制の「安全日誌」「サービスノート」 今日の自分の気持ち・取り組みを書く。管理者がよいと思ったものが、後日プリントで紹介される。

⑤ 「マイヒヤット」 「職場内の危険箇所を知っておくことが大事。」と、サービス勉強会などで時間を与えられ、各自が経験をメモにし、後日プリントで紹介される。

⑥ 「サービスメモ」 『お客様の「意見」(社員の声も含む)』として数多く支社にあげれば、「改善が早い」と推奨。

⑦ 個人の「年間目標(数値を含め)」 「提案」今月一人〇件、「大人の休日倶楽部」入会今年一人〇件という会社で決めたノルマとは別に、個人に目標を出させる。

⑧ 投票 一年の終わりに、駅十大ニュースの投票。年度の終わりに、駅収入が目標を越える日と金額の予想投票。

※ 以上の特徴として、言えることは・・・

ア、①②③④⑤⑥など、労働者一人一人に、話させ、書かせる。対話(質問・感想)・紹介・討論・・・といった、国鉄時代にはなかった方法。自発性を装い、ほめながら会社の方針へ誘導する。イ、③⑤⑥など、労働組合を通じての改善要求が出にくく(出なく)なる。ウ、⑧など、楽しませながらの、気持ちの統合 (国労・U)

## ◇ 読者からのおたより ◇

今年も「闘争団」へ 今年もまた北海道の闘争団の仲間に出会ってきました。全部の闘争団とはいきませんが、元気をもらってきました。何が何でもアキラメないことですね。(鹿児島・T)

編集部より たいしたものですね。新潟の小林義昭さんも車で回られる。闘争団仲間たち「今年も来てくれる」と大喜び。Tさんの場合も同じ、ある闘争団ニュースにTさんのこと書かれました。

健康は 遅れまして、申し分けありません。いつも時にあった情報ありがとうございます。暑い中、健康にご注意して下さい。(東京・O)

編集部より たくさんとりあつかっていただき感謝です。本当に暑い、暑いだけならいいけれど、シャワーとムシ風呂。貴兄こそご健康を!

コッチは寒い 暑い季節でしょうが、どうぞご自愛ください。こちらは寒い日が続いています。(北海道・S)

編集部より J P 労組第二回大会はいいかがでしたか。機関紙の大会特集号でおおよそ雰囲気はつかめますけれど、報告など寄せていただければ嬉しい。

再任用 国鉄に二十年(J R 北海道も俺を残さなかったのは大きな損失)先頭で旗を振ってきたからね。道に二十二年、来年三月いよいよ退職。六十五歳まで再任用。生きてくのあえぎあえぎの賃金と年金で生活することになる!

(北海道・I)

編集部より I さんもご卒業ですか。私も六十四。集まり、勉強会ではいつの間にも最高齢者です。